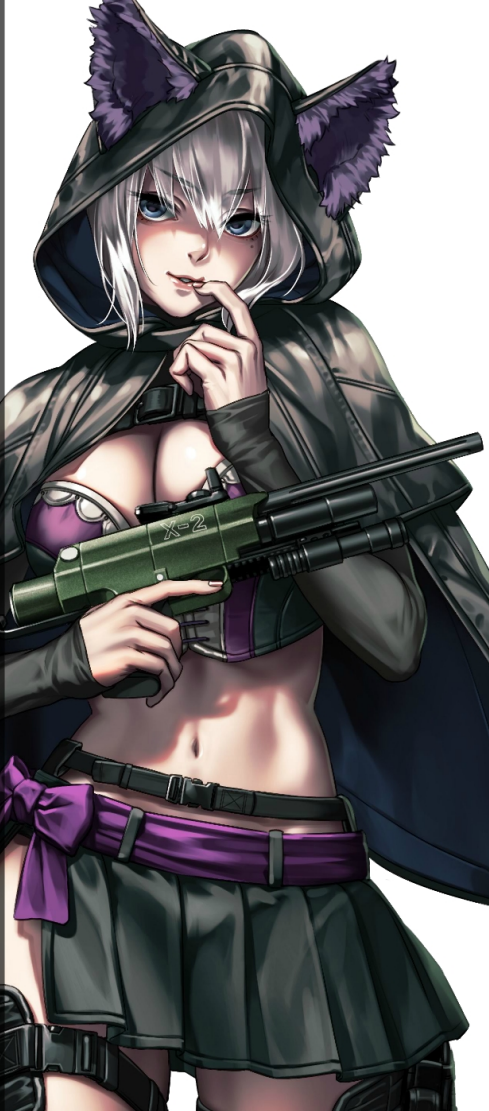


メンヘラ  
淫魔  
を  
寝つけた  
たい

「その淫魔は  
雨と共に」

特別続編  
シナリオ



# ディープな最新作配信中！

R18  
ADULT ONLY  
成人向け

家に帰ると、  
ヤンデレメイドが  
甘やかしてくれる。

異世界転移ファンタジー  
R18純愛ノベル

## 生き疲れ社畜と 異世界メイド

「私が一生、ご主人様のご面倒を見てあげますから。  
ずうっと、ずうっと……一緒ですよ？」

僕の初恋の相手は、  
蜘蛛女だった。

くもおんな

## 蜘蛛女の 楽園

著 相山夕ツヤ

「早く逃げた方が良くないじゃないかしら……？  
悪い蜘蛛が、ボウヤを美味しく食べちゃうかもしれないわよ？」

異世界転移ファンタジー  
R18純愛ノベル

R18  
ADULT ONLY  
成人向け

# 異世界転移恋愛奇譚シリーズ発売中作品紹介

現実社会は辛い事ばかりだから、異世界の少女と幸せになろう。



ヒロイン：  
**エイリス**

## 「ブラック社畜と赤ずきん」

クーデレ少女に尽くされたい。

主人公の部屋に突然現れた赤ずきんの少女エイリスとの交流と愛情を描く第一作。ブラック企業勤めで毎日が辛い主人公が、クーデレ気味に尽くしてくれるエイリスとの交流と献身的なHによって、徐々に強い自我を取り戻していく物語が見所です。



睡眠姦/布団で初H/夜の電車でH  
お風呂で貪欲フェラ/甘々ご奉仕H



ヒロイン：  
**メリル**

## 「ゆるふわメイドと機関銃」

ゆるふわ天然メイドに癒されたい。

夜道で拾った異世界メイドとの交流を描くドタバタラブコメディ風の第二作。異世界でクビになったロリ巨乳メイドが、主人公の為に何とか役に立とうと大奮闘。人それぞれで良いじゃないとお互い慰め合いラブラブエッチに過ごすふんわり物語。



無邪気に手コキ/ご奉仕フェラ  
ラブラブ初H/朝だけど二回戦



ヒロイン：  
**エイカ**

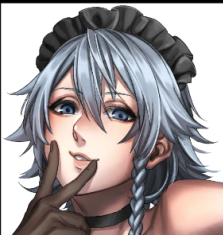
## 「その淫魔は雨と共に」

エロいメンヘラと共依存したい。

雨が降りしきる夜の公園で出会った、妖しい黒ずきん少女との危険な愛欲を描く第三作。童貞で孤独な主人公がメンヘラ淫魔少女と流されるままに性交し、それから彼女なしでは生きられないと強い愛着を抱いていく共依存溺愛ダークラブストーリー。純愛です。



雨濡れ騎乗位で童貞喪失/甘々授乳手コキ  
貪欲肉食エッチ/お尻で初エッチ



ヒロイン：  
**ローヤ**

## 「吸血メイドのご奉仕生活」

高雅な吸血鬼メイドと夜通しHしたい。  
夜道で助けた美女は異世界のメイドで吸血鬼  
でしたという第四作。

出会いの場面が済んでからは、ひたすら攻守  
交代しつつ夜通しセックスしっぱなしのエロ  
さ大濃縮作品になっています。オススメ。

初めての吸精フェラ/ラブラブ中出し初H  
パイズリご奉仕/騎乗位攻H/反撃種付プレス  
気絶するまで絡み合い/朝勃ち性処理セックス



ヒロイン：  
**シュノリュース**

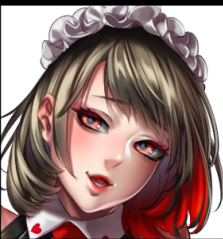
## 「蜘蛛女の楽園」

青肌人外蜘蛛女とおねショタしたい。  
異世界に飛ばされたショタ少年と、青肌蜘蛛  
お姉さんとの恋愛模様を描く異色の第五作。

主人公とヒロイン以外は敵だらけ、多くの  
苦難が立ちはだかる中で、異種族ながらも  
強く想い合う二人の純情ラブストーリー。

でも、エッチはものすごく肉食系。

キスしながら優しく手コキ/  
あまあま授乳手コキ/搾精孕ませ交尾



ヒロイン：  
**アヤカ**

## 「生き疲れ社畜と異世界メイド」

Hなメイドに毎日甘やかされたい。  
生き疲れた社畜童貞主人公がひたすら異世界  
メイドに重めの愛で甘やかされる第六作。

突然始まる甘々メイドライフ、そして徐々に  
明るみになる重い愛に溺れていく純愛作品。  
Hシーンもたっぷり特濃です(当社比)

ご奉仕中出しH/夜通し種付けH/おはようフェラ  
帰宅後速攻で発情H/バックで激しくケモノH  
汗だくお尻で騎乗位H/あまあまパイズリ



『その淫魔は雨と共に』のあらすじ

上司から理不尽に叱られ、連日のサービス残業で心身疲れ果てた独身童貞サラリーマンの『俺』。

絶え間なく冷たい雨が降り続ける家路の途中、公園に一人の黒い少女が居るのを見つめる。

「わたし、行くところが無いの……。おにいさん……。わたしを誘拐してくれる……？」

雨に濡れながら、妖艶な笑みを浮かべる少女、エイカ。

真意が分からず気は進まないが、放っておくことも出来なかった俺は、観念してそのままエイカを家に泊めることにする。

ところが家に着くなりエイカは俺に抱きついて、そのまま淫らに俺を求めてくる。

情欲に抗えず、雨に濡れた身体のまま俺とエイカは、寂しさを慰め合うように激しい性交に溺れていく。

俺は、かつて学生時代に片思いしていた幼馴染を先輩に取られたトラウマから、誰かを愛するなんてもう二度と御免だと強く思っていた。

しかし、エイカとの熱い性交を覚えてしまったことで、そんな決意は脆くも霧散し、それどころか彼女がいない孤独の時間が耐えられなくなってしまい、自然と彼女に強く依存する精神状態になってしまう。

エイカもエイカで、謎の『仕事』でお金を稼いできたり、俺に怪しげな薬を盛ったりと、数々の危なっかしさを匂わせつつも、彼女も俺が大好きだと常々求めてくるので、なし崩しにメンヘラ同士の共依存生活が始まってしまった。

色々あったが今のところ、俺とエイカは幸せだ。

『メンヘラ淫魔を躰きたい』

「再生数上がってる上がってる……やったあ」

駅のホームで電車を待ちながら、エイカは俺のスマートフォンを見て小さく喜びの声を上げた。

「ねえ、おにいさん……言ったでしょ？　こんな動画でも、私がやれば、ウケるんだって」

「ああ……そう、だな」

俺は嬉しいのか妬ましいのかよく分からない心境で、そのメンヘラ気味の恋人の言葉に返事をする。

エイカと同棲生活を送って三ヶ月が経過したが、彼女と出会う以前と比べて俺の生活は一変した。

まるで、卵から生まれた雛が初めて見た相手を親と認識するという現象のように、俺は自分の童貞を捧げたエイカをすっかり盲愛するようになってしまった。もはや彼女のいない生活など考えられない。

情けない話だが、あれからエイカと片時も離れたくないという気持ちから会社へ行くのが億劫になってしまい、今は色々あってただの無職だ。

普通、恋人という精神的な支えを得たら人間は強くなるものだと思うが、俺の場合はすっかり弱体化の一途を辿っており、エイカがいなくなると孤独に苦しめられて寝たきりになってしまいう有様だった。

そんなだらしなくなつた俺を、エイカはいつも優しく受け入れて世話をしてくれる



し、俺が求めれば必ず身体を開いてくれる。エイカはいつでも俺を愛して尽くしてくれる。だからこそ俺は彼女に縋って甘えてしまい、依存がやめられない。

俺の仕事での収入が消滅した代わりに、今の我が家の家計を主に支えているのは、エイカの動画投稿活動だ。

もともと俺が勧めたのが始めるきっかけだったが、二・五次元と呼んでも過言ではない可愛らしい顔立ちとエロチックな身体を併せ持つエイカの人気は瞬く間に火が点き、今やエイカの動画チャンネル登録者数は十万人を超えた。

「……今さらコーラにメントスを入れるだけの動画で、こんなに伸びるものなのかよ。予想できないって」

「言ったでしょう、おにいさん。男なんて、そんなものだって」

エイカはフッフと怪しげに微笑みながら、自分の指をペロリと舐める。

「無防備な女の子が、泡立つ液体を全身にびゅーって浴びちゃう動画だよ？ 興味ないわけないよねえ」

「そこは『びゅーっ』じゃなくて『ブシャーッ』とかでしょ……」

「そう？ 『ブシャーッ』の方が、私はエッチだと思うけどなあ」

俺はゴクリと唾を飲んで、それ以上のコメント控えた。

エイカが動画でやっている事は、商品レビュー、ゲーム実況、メントスコラのような少し身体を張ったおもしろ動画程度のことと、他の動画投稿者と比較しても特別なことはやっていないのだが、彼女のエロチックな衣装や下ネタを交えたトークのせいで再生数が常に伸びる伸びる。

ちなみに、彼女のチャンネルの再生数一位の動画は『胸にバナナを挟んで食べてみ

た』、二位の動画は『初めてホラーゲームに挑戦したら色んな意味で濡れた』、三位の動画は『新しいマッサージ器を全力体験してみた』である。

彼女の人気のおかげで、今や働くのが馬鹿らしくなるくらいの広告収入が毎月入ってくる。つまり俺は完全なるヒモ状態だ。一応、彼女の動画の撮影や編集などの雑務は俺が行っているのですが、何もせずに甘えて寝転がっているというわけではないが。

今日は、今後の動画で使う為のエイカのコスプレ衣装をいろいろ物色してきた帰り道だ。俺が片手にぶら下げている紙袋には、メイド服とスクール水着が入っている。どうか、帰るまで職務質問を受ける事がないのを祈るばかりだ。

「今度はどんな動画撮ろっか？ 私は、もっと攻めてみたいなあ。お股にローターを入れた状態でゲーム実況とか」

「消される消される！ チャンネルが凍結されたら元も子もないだろ。一応、全年齢向

けっていう体なんだから……」

「なら表向きは風邪気味ってことにして、ほんとはローターを入れた状態でゲーム実況っていうのは？」

「もう、ローター入れたいだけだろ……？ それはやめろ。却下！」

「えー、どうせ映らないんだからいいと思うけどねえ……。再生数も伸びると思うよお」

このエイカの貞操観念の薄さが、俺にとっては大きな気掛かりだ。

今のところ、ほとんど二人で一緒に離れず行動しているから彼女が浮気しているというのはいはずだが、それでもライブチャットやSNSで熱心に言い寄ってくるファンに対してエイカも思わせぶりな返答する時があり、それがあくまで営業トークだと分かっていても、俺は激しい嫉妬心を燃やしてしまう。

俺のそんな視線を気にすることなくメールを確認していたエイカが、急に顔を上げた。

「あ、おにいさん！ 人気動画配信者だけが集まる特別オフ会のお誘いが来たよ。チャンネル登録者が百万人超えてる人もバンバン来るみたい」

「ええ……？ なんだと？ どういう顔ぶれで？」

俺はエイカからスマートフォンを受け取って、そのメールの詳細を確認する。

そのメールは、エイカに企業依頼案件を回してくれたこともある男の大物動画配信者から送られてきたもので、本物とみて間違いない。それに参加予定のメンツも、名の知れた人気動画配信者ばかりだ。

だが気になるのは、その顔ぶれが男だらけということだ。しかもイケメンを売り込んでいる動画配信者も多い。

「……………どうするんだ。行くのか？」

俺個人としては絶対に反対だったが、あえて俺はエイカの気持ちを聞きたくて尋ねた。

「私は、行きたいなあ。だって……………お金持ちが沢山あつまってきそうでしょ。この『カガヤク』って動画配信者なんて、年収数億円って噂じゃんか。私、この人と知り合いになってみたいなあ」

それを聞いて俺の嫉妬心がムクムクとさらに膨らんだ。

『カガヤク』という男は青年実業家という肩書を持ち、自分の財力を活用してとにかく経費の掛かった動画を多くアップすることで人気の動画配信者だ。その爽やかな顔立ちと軽快なトークも人気で、女性視聴者から特に厚い支持を受けている。

「知り合いになって……………どうするんだよ」

「そんなの、決まってるでしょ？ クレカの番号を……じゃなくて！ あの、お金回りの良い案件とか色々回してくれそうでしょ？」

彼女が最初に言いかけた言葉は聞き取れなかったが、とにかく参加に前向きな気持ちを持っているエイカに、俺は顔を強張らせる。

「もし……その金回りの良い仕事をくれる条件が、エイカの身体を引き換えにすることだったら、エイカはどうするんだよ」

「それって、枕営業？ おにいさん、そんなこと心配してくれてるんだあ」

エイカは俺の心配を知ってか知らずか、からかうようにクスクスと笑う。

「ねえ、おにいさん。もし私がオフ会に行っただけのまま帰ってこなかったらどうする？ し

かもその後にメールで、オフ会の人たちに私が犯されてる動画が送られてきたら……?」

「お、おい、冗談じゃないぞ……!」

するとエイカは俺の耳元で、甘ったるく囁く。

「……私が、色々な男の人の精子を身体中にたっぷり浴びて、ナカにもお尻にもたくさん出されて、嬉しそうにしていたら? おにいさんじゃない他人のおちんちんで、私は何度も何度もイカされてたら? おにいさんは怒る? 悲しむ? それとも……私の痴態を見て、パソコンの前でシコシコしちゃう?」

わざと情欲を煽る想像を掻き立ててくる。

「や、やめろ、やめろって……! そんな寝取られ趣味なんてあるわけないだろ……!」



「ほんとにいい……？ 私、知ってるんだよ？ 私がライブチャットでファンと話している時、おにいさんが陰でずーっと悔しそうな顔しながらも、おちんちん固くしてるって」

「な……どういう意味だよ……」

「口では否定してても、そういう願望があるんじゃないかなあ……って思ってた。ライブチャットの後、いつもより凄く激しくエッチしてくるでしょ？ だから私が、本当におにいさんじゃない男の人に犯されちゃったら、おにいさんの性欲はどうなっちゃうのかなあって思ってた……ね？」

そう言ってエイカは、妖しく唇を舐める。

「だからね……オフ会にも、あえて無防備で参加してみたいんだあ……。それで、その様子の一部始終を動画に撮って、おにいさんに見せてあげるの。そうしたら……おに

いさんのおちんちん……どうなっちゃうかなあ？」

俺は怒りと嫉妬と興奮が入り混じる、とにかく頭の中が煮えるような精神状態になって、無言で立ち尽くす。

そこでちょうど、ホームに待っていた電車がやってきた。

「ほら、おにいさん。この話はおーわり。帰ろ？」

強いわだかまりを残す俺をよそに、エイカは呑気なステップで電車に乗り込む。言いたいことは色々あるが、俺は黙って溜息をついて、それに従った。

休日だが夕方の電車なので、人はかなり多く混み合っている。座れる席などもちろん無く、俺とエイカは人混みの中で窮屈に立ち乗りすることになった。

ドアが閉まって電車が動き出すと、さっそく揺れによって周りの乗客がよろめいて

傾き、背中を押されて倒れそうになる。

エイカを守るべく吊革に掴まって踏ん張っていると、エイカが甘えた声を掛けてくる。

「ねえおにいさん、スマホ貸してよ。ゲームやりたいから」

「おいおい、両手塞がるだろ。掴まってないと危ないぞ……?」

「いいでしょ? おにいさんが支えてくれるし」

言いくるめられて、エイカは俺の身体を背もたれにしながらさっそくスマートフォンでブロック崩しゲームを遊び始める。

……ひょっとして俺は、ただの都合の良いキープ用の男なのか?

ヤンデレとメンヘラは、なんとなく似ているようで違う。

ヤンデレというものは相手への愛が病的に強すぎることを云うが、それに対してメンヘラというのは自己承認欲求が高すぎる人のことを指す。誰かに常に愛されなければ絶対に嫌で、さらにその欲求は飽きることを知らず、より多くの人間に好かれることを求めていく。投げかけられる愛が多ければ多いほど、メンヘラは幸福になる。

エイカと俺が愛し合っていることは間違いないと思うが、エイカはそれでまだ満足していない様子がある。俺よりもイケメンで器量もあり金もある男たちに愛されるようになったら、エイカの承認欲求はさらに満たされていくだろう。そうしてエイカは男たちの共有財産となっていく、俺はただの彼女のマネージャー兼竿役の一人となってしまうのだ。

……そんなの、許すかよ！

妄想がエスカレートして独占欲が爆発した俺は、ゲームに夢中になっているエイカ

の尻にスカート越しにそっと手を添えた。手のひらに、彼女のお尻の肉がむにゅっと押し当たる。

「ん……？」

エイカは少し反応するが、たまたま手が当たっただけかと思いだんだのかそのままゲームを続行した。

そういうつもりならと俺は、さらにその丸いお尻の感触を味わうように、スカートの上からゆっくりと撫でる。

いつもセックスの時には触っているが、こういう公衆の面前では感じるものが何もかも違う。窮屈で他人の視線があちこち入り組み合う満員電車の中で、俺は今から猥褻な行為をしようとしている。その背徳感に、俺の情欲は否応なしに焚きつけられていく。

どこまでエイカが平然を保ち続けるのか気になって、俺はエイカのお尻をより強くぎゅっと揉んだ。

「あっ……」

驚いたエイカがピクッと跳ねて、ブロック崩しゲームのボールを取りこぼしてミスをした。まだ残機は残っているが、どこまで耐えられるのか見ものだ。

俺はスカートの中に手を入れて、エイカの少し汗ばんだお尻の肉をもみもみとこねる。その官能的な感触に、ズボンの下で俺の股間はみるみる固く成長していった。

「ん……んんっ……」

周りの乗客を気にしてか、エイカは小さく呻くのみで何も言っていない。

「…………どうした？ 風邪気味か？」

俺はエイカの臀部をむにゅむにゅと揉みしだきながら、あえて彼女の出方を見たくて尋ねてみた。

「だ……大丈夫だよ。ありがと……」

エイカはそう言い繕って、ゲームに集中し始める。

恋人同士の関係とはいえ、ここは公共の電車内だからバレてしまえば困ったことになる。だからいつもお調子者のエイカも今は黙っているのだ。

ならばと思い、俺は彼女の腰を抱いてから、テントのように勃起した股間を彼女の尻にギュッと押しつける。

「…………んっ…………！」

そしてスカートをめくり上げ、彼女のお尻の谷間に固い勃起をズリズリと埋め込んでいく。

「ふっ……んんう……」

固くそそり立った先端が、何度もエイカのお尻の穴をパンツ越しに擦り上げて、俺は背筋がゾクゾクするような快感を感じていた。

やや蒸れて温かいスカートの中で、俺の股間を小刻みに擦り付け続ける。

身体を押しつけ合っているだけなのに、ここまでの背徳的な快楽を得られるとは思ってもいなかった。周りの乗客はほとんど背中を向けていて、しかも自分のスマートフォンやイヤホンの音楽に集中しているので、電車の揺れのおかげもあって間近でも二人の異変に気付く者はいない。



そしてさらに調子に乗った俺は、腰を抱いていた手もスカート内に滑り入れて、躊躇なくパンツの中に指を潜り込ませた。

「んんっ……ああ……」

汗ばむ肉の割れ目に俺の人差し指が達して、エイカが身をよじった。それでブロック崩しはどうとうゲームオーバーになった。

指先で彼女の陰唇の感触を確かめるようにヌヌツと撫でてから、その上部にある肉芽をクリッとつねる。

「ひっ……んんっ……」

エイカは言葉少なに震えて、身を縮めた。

これほどしおらしい彼女を見るのは初めてだ。いつもは俺の性欲を煽るような甘い言葉を言うのに、今回はそれが封じられたことで、すっかり受け身になっている。

彼女の膾口が湿り気を帯びてきたのが分かる。指先に力を込めると、にゆるっ……と熱い肉の中に指が沈み込んでいく。

「ふぁっ……んうっ……」

もうゲームに集中していられなくなったのか、エイカはスマートフォンの画面を消して、自分の口に手を当てて漏れる声を抑えた。

---

試読版は以上です。続きは本編で！

# ガンスミス・アイヤマ

